

Title	「ハイピアリアン」と「ハイピアリアンの没落」の同一性と差異性 : (2)共通の詩行について : その3
Author(s)	安藤, 幸江
Citation	Osaka Literary Review. 15 P.64-P.78
Issue Date	1976-12-25
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25662">https://doi.org/10.18910/25662</a>
DOI	10.18910/25662
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 「ハイピアリオン」と「ハイピアリオン の没落」の同一性と差異性

—(2)共通の詩行について—その3

安 藤 幸 江

## はじめに

本誌12号、13号に続き、この号においても共通の詩行についての考察をすすめて行きます。14号は筆者の都合で休載致しました。

本稿では「ハイピアリオン」第一巻、95—125行と、「没落」第一巻、412—429行とを比較検討します。この箇所は、王位喪失を嘆くサターンがその心情を吐露する情景です。便宜上、三段に分かちます。

## 1

「ハイピアリオン」第一巻、95—106行、と「没落」第一巻、42行。

「ハイピアリオン」第一巻、95—106行は、「没落」第一巻、412行に該当します。以下、それぞれ引用してみましよう。

- ' O tender spouse of gold Hyperion ;
- ' Thea, I feel thee ere I see thy face ;
- ' Look up, and let me see our doom in it ;
- ' Look up, and tell me if this feeble shape
- ' Is Saturn's ; tell me, if thou hear'st the voice
- ' Of Saturn ; tell me, if this wrinkling brow,
- ' Naked and bare of its great diadem,
- ' Peers like the front of Saturn. Who had power
- ' To make me desolate ? whence came the strength ?
- ' How was it nurtur'd to such bursting forth,
- ' While Fate seem'd strangled in my nervous grasp ?

' But it is so;

(*Hyperion*, Book I, 11. 95-106)

' Moan, brethren, moan;

(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 1. 412)

「ハイピアリオン」は、ハイピアリオンの妻、スィーアに対するサターンの呼びかけで始まります。“Look up, and let me see…” “Look up, and tell me…”と同じような命令文が並んでいますが、特に、“tell me if…”は三度も使用されています。この弱々しい、年老いた、王冠も被らない姿が、本当に己れのサターンなのかどうか教えてくれと頼みます。ここで三度登場するサターンは明らかに「王者としてのサターン」、或いは「神の中の神たるサターン」の謂です。

王位を失った者が直ぐには喪失の惨めな己れの状態を理解できず、「一体自分は誰なのか」と戸惑う姿は、よく指摘されますように、「リヤ王」の中に見られます。

Does any here know me? This is not Lear.

Does Lear walk thus? speak thus? Where are his eyes?

Either his notion weakens, his descendings  
are lethargied. Ha! waking? 'tis not so,

Who is it that can tell me who I am?

(*King Lear*, I, iv, 11. 226-9).

リヤ王は、“This is not Lear”とはっきり自己を否定しています。彼はリヤがこんな風に歩くだろうか、こんな風に話すだろうかと問うていますが、明らかに既に自らの内に“no”の答を期しています。彼の言うリヤとは、王者リヤであって、王位喪失の現実のリヤではありません。彼は自分の知覚力の減退を感じつつも、それも認めること能わず、“waking? 'tis not so,”と言って、自分は目覚めているのではなくて眠っているのだと思ひ込もうと努めます。所詮、現実の自己を「諦観」したくなく、自我を放棄して、ただ自己慰撫しては悲嘆の淵に身を委ねるのです。

これに対して、サターンは“*This is not Saturn*”とは言いません。

己れの “feeble shape” や “wrinkling brow, naked and bare of its great diadem” がサターンのものかどうか尋ねて、“no” という答を期待するのは上叙リヤの場合と同じですが、“But it is so” と断定します。実在の自己を既に確乎と捉え得ています。この点で、当該サターンとは、「自我の意識」が盛んに議論されるようになった「19世紀の詩人」の創造による近代的性格を帯びたものと確信し得るように思います（3で闕説）。

続く105行目。これは、極めて力強い行になっています。まず、“nervous” ですが、*O. E. D.*によれば、

nervous, *a.* Sinewy, muscular; vigorous, strong. Of parts of the body.  
Now rare.

とあります。そしてまた、“strangle”（扼殺する）という強烈なイメージの動詞がその前に配置されています。更に、主語、“fate”が大文字にされ、擬人化され、主体化されます。か弱くあるべき「運命の女神」は、自分の力強い握力で絞殺されていた筈なのに、運命は己れの思いのまま掌中にあった筈なのに、と全くの非力化をサターンは嘆きます。

ところで、「ハイピェリアン」では11行半もかけてサターンが語ったことが、「没落」にいたって、半行にも満たない、

“moan, brethren, moan;”

のたった三語に変わっています。これは前者に比し余りにも短い、ということとどまらぬ一つの不思議です。「ハイピェリアン」では、スィーアへの呼びかけであったのに対し、ここでは自分と同じく没落した他の神々へのそれに代っています。しかも、最初から“moan”「嘆け」という弱い消極的な言葉です。これを評して、*M. Allot* は、“The alterations are designed to increase Saturn’s pathetic weakness and loss of hope”<sup>(1)</sup>と412—30行への註で述べています。至言だと思えます。かかる“moan”というのだしは、まさに語の全意義における諦観の表明でしかありません。己れの実相のしみじみとした認識なるが故の、老惨への絶望、「没落」の寡言なサターンの心情吐露なのです。

## 2

「ハイピアリオン」第一巻、106—111行、と「没落」第一巻、412—417行。

この数行は、自分が、„der über uns gehende“ の地位から没落して、あらゆる神の業から締め出された、すなわち神として何物も支配できなくなったことを述べるくだりですが、ここは両詩、殆んど行が共通しています。次にその箇所を各々、対照的に引用してみましょう。

and I am smother'd up,

- 'And buried from all godlike exercise
- 'Of influence benign on planets pale,
- 'Of peaceful sway above man's harvesting,
- 'And all those acts which Diety supreme
- 'Doth ease its heart of love in.

(*Hyperion*, Book I, 106-111)

for we are swallow'd up

- And buried from all godlike exercise
- Of influence benign on planets pale,
- And peaceful sway above man's harvesting.
- And all those acts which Deity supreme
- Doth ease its heart of love in.

(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 11. 412-417)

文頭の小さい丸印は両詩共に同じであることを指し、下線は異同を示しています（もちろん、これらの印は筆者によるものです）。

各々最初の一行、すなわち、「ハイピアリオン」106行目と「没落」412行目に差異が認められます。文頭の“and”と“for”の相違は前の文章との関わり合いによるものなので、問題には致しません。“I”と“We”の相違も、前者は自分がスィーアに呼びかけているのですから、当然“I”ですし、「没落」の方も、“I”と言いたいところですが、これは“brethren”に呼びかけているので、“We”として、兄弟の神々との連帯感を出しているわけです。問題は次の他動詞で、ニュアンスにかなり違いがありま

す。各々、*O. E. D.* を検索してみますと、“smother”は、

smother, with *up*. To cover up in a close, dense, or suffocating manner, etc.

とあり、キーツの当該行文が引用してあります。一方、“swallow”は、

swallow, *fig*. To make away with or destroy completely; to cause to disappear utterly (as if by absorption).

の意と思われまふ。言わんとしていることは結局は同じなのですが、イメージとしては、“smother”の方がユニークであり、しかもサターンのこの場の心情をよく表現している感がします。尚、「ハイピエリアン」106行目“of”と「没落」415行目“and”の差異はたいしたことではありません。

ついでながら、ここで述べられているサターンの治世は、紀元前8世紀のギリシャの詩人ヘシオドスの「仕事と日々」によりますと、周知のいわゆる黄金時代であつて、その頃の人間は、心に煩いを知らず、労苦も悲しみもなく、あらゆる禍から遠く離れ、楽しい饗宴に日々を送つたとあります。そして安楽と平和のうちに神々に愛せられ、あらゆる物質は目ざから地に溢れ、播くことも刈ることも要らずに、老いも知らず、ただ飽満ちた時は、自然と眠りに入ったまま死んで行きました。ここに *Leob Classical Librai* より、ヘシオドスの原典とその英訳とを引用しましょう。この中で、1111行目“Κρόνου”(Cronos)とあるのは、クロノスでサターンの同一神とされています。

Χρόνου μὲν πρῶτα γένος μέρπων ἀνθρώπων  
ἀθάνατοι κούρην Ὀλύμπια δῶματ' ἔχοντες.  
οἳ μὲν ἐπὶ Κρόνου ἦσαν εἴ οὐρανῷ ἡμῶσιν  
ᾤσατε θεοὶ δ' ἔξωον ἀκράτεια θυμὸν ἔχοντες  
νόσφιν ἄτερ τε πόνων καὶ ἀίξουσ' οὐδὲ τι δειλὸν  
γῆρας ἐπιῖν, αἰεὶ δὲ πάθος καὶ χεῖρας ἡμοῖσι  
τέρποντο' ἐν θαλίῃσι κακῶν ἔκτοσθεν ἀπάντων  
ὄνησκον δ' ὄσπ' ὕπνου δεξιμῆμον ἰσθλὸν δὲ πάντα  
τοῖσιν ἔην καρπὸν δ' ἔφερον ζεῖθωρα ἄρουρα  
αὐτομάτῃ πολλὸν τε καὶ ἄβηονον εἰ δ' ἐβελήωι  
ἦνοιχοι ἔργ' ἐνέμενον ὄνν ἰσθλοῖσιν πολλέσσιν.  
ἄφνειοὶ μύλοισι, φίλοι μακάρεσσιν θεῶσιν

First of all the deathless gods who dwell on Olympus made a golden race of mortal men who lived in the time of Cronos when he was reigning in heaven. And they lived like gods without sorrow of heart, remote and free from toil and grief : miserable age rested not on them; but with legs and arms never falling they made merry with feasting beyond the reach of all evils. When they died, it was as though they were overcome with sleep, and they had all good things: for the fruitful unforced bare them fruit abundantly and without stint. They dwelt in ease and peace upon their lands with many good things, rich in flocks and loved by the blessed gods.<sup>10</sup>

ローマの詩人大抵は *Saturnia regna* と呼びましたが、これについては、オーヴィドの「メタモファシス」第一巻、89行目以下に詳しく語られています。最初の二行を引用します。

(英訳)

Aurea prima sata est aetas, quae vindice nullo sponte sua, sine lege fidem rectumque colebat.<sup>11</sup>

Golden was that first age, which, with no one to compel, without a law, of its own will, kept faith and did the right.

それ故、この時代には罰も脅かしの言葉もなく、歳く者が居なくても、人々は安全に暮しました。町も畑で囲まれることもなく、戦いもなく、したがって武器なども要りませんでした。

さて、キーツはこの詩であらゆる神らしい業<sup>わざ</sup>として、まず “influence benign on planet nale” を挙げています。この行は、“benign”, “pale” 共に形容詞が後置されていて、Miltonic inversion を示しています。また、“planet” と “pale” は頭韻をなしています。第二の業として、“peaceful sway above man’s harvesting” (「人々の収穫にも平和な采配を振るう」) を挙示しています。ここのサターンは元来「農耕の神」です。それ故にこそ、地は耕されなくとも自ずからあらゆる物質を生み出す、と約言できる次のオーヴィド「メタモフォーシス」の中の言葉が意味を持つわけです。

ipsa quoque immunis rastroque intacta nec ullis  
 saucia vomeribus per sedabat omnia tellus,  
 contentique cibus nullo cogente creatis  
 arbuteos fetus montanaque fraga legebant  
 cornaque et in duris haerentia mora rubetis  
 et quae deciderant patula Iovis arbore glandes.  
 ver erat aeternum, placidique tepentibus auris  
 mulcebant zephyri natos sine semine flores;  
 mox etiam fruges tellus inarata ferebat,  
 nec renovatus ager gravidis canebat aristas;  
 flumina iam lactis, iam flumina nectaris ibant,  
 flavaque de viridi stillabant ilice mella.

(*Metamorphoses*, i, 101-112)

当該の英訳を掲げておきましょう。

The earth herself, without compulsion, untouched by hoe or plowshare, of herself gave all things needful. And men, content with food which came with no one's seeking, gathered the arbuté fruit, strawberries from the mountain-sides, cornel-cherries, berries hanging thick upon the prickly bramble, and acorns fallen from the spreading tree of Jove. Then spring was everlasting, and gentle zephyrs with warm breath played with flowers that sprang unplanted. Anon the earth, untilled, brought forth her stores of grain were planted in long furrows, and bullocks groaned beneath the heavy yoke.

(*Loeb Classical Library*, pp. 9-11)

「ハイピエリオン」110行目、「没落」416行目の “Deity supreme” は、また Miltonic inversion になっています。次行が示すように、黄金時代の神々は、キーツによれば、愛に溢れ、人々はその愛に育まれて平和に豊かな生活をしていたのでしょう。

### 3

「ハイピアリァン」第一巻、112—125行、と「没落」第一巻、417—429行。

ここでは、内容にかなりの異同があります。前者は、自己喪失を嘆き、スィーアに真の自己を探して来てくれと頼みます。これに対し、後者は、自分が王位を失った後も世の営みの変らぬことを不満に思うと共に、自分の弱さを嘆きます。いろいろ問題のある箇所ですので、二つに分け、吟味検討しましょう。

— I am gone

- 'Away from my own bosom: I have left
- 'My strong identity, my real self,
- 'Somewhere between the throne, and where I sit
- 'Here on this spot of earth.

(*Hyperion*, Book I, 11. 112-116)

“I am gone/Away from my own bosom” は、なかなかユニークな表現で、サターンの空しい、虚ろな気持ちをよく表わしています。当該箇所での焦点は、次行の“identity”をめぐる問題で、それは、*O. E. D.* によれば、

identity, The sameness of a person, a thing at all times or in all circumstances, the condition or fact that a person or a thing is itself and not something else; individuality, personality.

の意と検索できます。個性とか、その人らしさとか人格とかいったような意味です。その用例として、同辞書は、アーヴィングの「スケッチブック」(1820年)の次の行文を引いています。

He doubted his own identity, and whether he was himself or another man. (*Sketch Book* I, 85)

“identity”なる言辞を使用するところに、このサターンが、遠い昔(ギ

リシャ・ローマ)の神話の世界のサターンではなくて、ego(自我)の意識の強い19世紀の所産であるのがわかります。キーツがギリシャ神話に新しい意味を賦与したと評されるのは、一つには、このようにサターンに近代的性格を持たせたこと、ないしはサターンの近代化にあるのだと思います。というより真実は、そのような単にギリシャ神話解釈上のユニークさ、鋭さというような抽象的、古典的意義でなく、キーツ的現代の、彼、その所属階級、人間一般の個別、特殊、普遍の三契機における人類の運命、境位(詩人のそれも包含した)に鋭い洞察のメスを加えたことこそ、キーツの本領は決せしめられるべきでしょう。

その意味でも、当“identity”解釈にキーツ理解の鍵がありそうです。たとえば、M. Allotはこの113—116行への註で、

**Titans are men of identity and power. Their successors, the Olympians, whose qualities are epitomised in Apollo, have no identity and express Keats's idea of the poetical character. (M. Allot, p. 403)**

と彼女なりの説明をしています。いうまでもなく、“Titans”(タイタン族)とは、サターンに代表される、ジュピターによる敗北以前この世を支配していたところの巨人族で、Uranus(天)とGaea(地)とを父母とする神の一族です。キーツにあってはサターン達、黄金時代の神々は、“men of identity”であり、“men of power”なのです。すなわち、強烈な自己と壮んな力を持ったものなのです。しかし、このタイタン族の後に続く、オリンピアの神々の場合は違います。彼らは、M. Allotも指摘している如く、「ハイピアリァン」の中のアポロの姿に集約され、identity(自我)を持っていないのです。われらの詩人は、彼らを“poetical character”(詩人的性格)とか、“Men of Genius”とか呼称しています。

このことは、彼の次の二つの手紙によってよく理解されます。

[I]まずは、1818年10月27日付出版者、リチャード・ウッドハウス宛てた手紙。その中で彼は“poetical character”について詳しく説明します。

As to the poetical Character itself, (I mean that sort of which, if I am

anything, I am a Member ; that sort distinguished from the Wordsworthian or egotistical sublime ; which is a thing per se and stands alone) it is not itself—it has no self—it is every thing and nothing—It has no character—it enjoys light and shade ; it lives in gusto, be it foul or fair, high or low, rich or poor, mean or elevated—It has as much delight in conceiving an Iago as an Imogen. What shocks the virtuous philosopher, delights the camelion Poet. It does no harm from its relish of the dark side of things any more than from its taste for the bright one ; because they both end in speculation. A poet is the most unpoetical of any thing in existence ; because he has no Identity—he is continually in for—and filling some other Body—The sun, the Moon, the Sea and Men and Women who are creatures of impulse are poetical and have about them an unchangeable attribute—the Poet has none ; no identity.

(To Richard Woodhouse, 27 October 1818)

この手紙でキーツが言わんとしていることは大略次のようです。キーツの詩人的性格というのは、ワーズワース的、或いは自己中心的なものではなくて、それは自己を持たぬのを身上とします。全てであると同時に「無」でもあるのです〔いわゆる、かのエレア派的「<sup>ヘン</sup>—に<sup>カイバン</sup>して全」的思想〕。まさにそれ故に詩人は、悪のイヤゴーターたり得るし、善のイモジエンにもなれるのです。「変身」自在なのは、あたかも南無観世音菩薩のようです——“camelion Poet”なる表現に注意——。明暗両面、彼は喜びます。詩人は全ての存在物のうちで最も非詩的 unpoetical なものです。彼は“identity”を持たないからです。彼は他のものを満たします。太陽とか月とか、海、それに男とか女といったものは、“poetical”（詩的）であり、かつは不変（一定）の属性を具えています。無限転生の詩人は質のどんづまりにおいてはいざしらず、当該の詩では固有の己れらしきものを何も持ちません。転変 metamorphosis のうちに己れに止るもの、己れを保存するもの、“identity”、個性はありません。かのエーテルの如くことん正体なき無定形な (amorphous) なものです。

同じ“poetical”でも意義に大なる隔絶があります。すなわち、文中“the poetical Character itself”の“poetical”とは、“of proper to

poets” の意で、「詩人の」とか、「詩人的」とかの意と解されます。これに対して、“A Poet is the most unpoetical…”や、“The Sun, the Moon… are poetical” の “poetical” は、“of proper to poetry” で、「詩に適する、詩題になる、詩的な」の意と思われます。

[II]第二の資料として、少し遡って、1817年11月22日友人 Bailey 宛て手紙の場合。ここにおいて彼は、まだ “poetical Character” を使用していません。が “Men of Genius” という言葉で以て、上叙の主旨を指しています。別言すれば、“identity” はなく、“individuality” とか、“determined Character” とかがみえますが、指示内容は、上で引用した一年後の手紙でのそれと差異はありません。“identity” を持つ人々は、“Men of Power” と別称されます。

... Men of Genius are great as certain ethereal Chemicals operating on the Mass of neutral intellect... they have not any individuality, any determined Character. I would call the top and head of those who have a proper self Men of Power—

(To Benjamin Bailey, 22 November 1817)

このように、キーツの考えでは、人間は、“identity” を持つ人々と、持たない人々とに分類されます。この「持たない」とは、否定の表現ですが、それは単純に消極の意味ではなくて、“identity” (自己) を持たぬが故に、“speculation” (想像力) によってあらゆるものに「生成」できるという積極の意味があります。形式論理学の限界を打ち破る、まさに、否定的傾向のうちに肯定的なそれを見つめるという「逆」弁証法的論理が、これです。

幼児 (das Kind) は、その想像力により、雲にも星にも、動物にも、鳥にも、何にでもなれますが、これは中心がない、つまり「無心」、でとられていない (impartial, neutral) からです。しかし、ひとたび自我に目覚めてくるや、“selfish”、“egotistical” となり、程度の差はあれ、自己から離れることは難しいことです。自己を超越して、(キーツ流に言えば、自己を持たずに) あらゆるもの、あらゆる性格のものに変身するということ

は、詩人の理想とするに適うことでしょう。キーツにあっては“identity”なきが“disinterestedness”と同一であり、これこそがひいては“Negative Capability”の理想境に到達する関門であったのでしょうか。美と真理と力とがその随伴者であるという彼の考えがここにも潜伏、貫徹しています。

“Men of Genius”の第一人者として、キーツはシェークスピアを挙げていますが、シェークスピアは「自己」を持たなかったので、というよりキーツと違って相対的「自己」を移動、移入できたので、想像力によって対象界に内在、あらゆるものに、入魂、転生、それ故にこそ、変化に富み、かつ生き生きした人間諸群像を創造し、かの龍大な精神現象界、迫真入神の作品をうみだし得たのでしょうか。

キーツがこの「ハイピエリエン」を書く時彼はサターンにも、スィーアにも、ハイピエリエンにも身を託する以上に、自己喪失、「没落」して、相対的、絶対的に (an und für sich)、それらになるのです。シェリーが、賦「雲によせる」「雲雀によせる」を作成した際、彼自身は、雲となり、雲雀となった、したがって対象＝客体に内在、自己没落して、己れの根底に行き (zu Grunde gehen) 得たのでしょうか——自己は空しく滅び、本然＝自然 (nature) の姿態となって、対象の自然 (根底、根拠、本質) と合体できる——。さなくば、あのようにみずみずしい、ヴィヴィッドな作品は生まれなかったでしょう。我々凡人は、もちろん、権力の側にある者は、別の意味で自意識も強いもので、ここでもそれと対応的だった、サターンは “my strong identity” と規定され、かつ “Men of Power” に属せしめられていました。

“identity”を持たない者は、それを失うことはないのは更なりですが、“identity”を保つものはそれを失う、或いは、失ったように感じる場合があります。今のサターンがそれで、彼は本当の自分が何処にいるか探せとスィーアに命じます。

Search, Thea, search!

'Open thine eyes eterne, and sphere them round

'Upon all space: space starr'd and lorn of light;

'Space region'd with life-air; and barren void;  
 'Spaces of fire, and all the yawn of hell.—  
 'Search, Thea, seach! and tell me, if thou seest  
 'A certain shape or shadow, making way  
 'With wings or chariot fierce to repossess  
 'A heaven he lost erewhile: it must—it must  
 'Be of ripe progress—Saturn must be King.

(*Hyperion*, Book I, 11. 116-125).

116—124行はスィーアへの命令文です。117行目、“Open thine eyes eterne”における“eterne”は、*O. E. D.*によると、*obs. exc. arch* (poet) で、*eternal* の意としてキーツのこの一行が引用してあります。“eyes eterne”は、また *Miltonic inversion* です。この場合、*eterne eyes* にすると *iambic* が壊れてしまいます。次の“sphere them round”の“sphere”は面白い用例ですが、*O. E. D.* では、

*sphere*, To send *about* in a circle; to turn *round* in all directions.

の謂で、これもキーツのこの行を掲げてあります。“sphere”を使うことによって、体ばかりでなく目も大きいスィーアがその眼球をぐるりと動かす姿が目に見えようです。

間をおいて 122—4 行目。主人公サターンはある姿、或いは影が翼をつけ、恐ろしい戦車を駆って、失った天を奪還しようと進んでいるのが見えるかどうかとスィーアに尋ねていますが、自分では置き忘れた己れの“*real self*”が敗北を認めず戦を続けていると想像します。ここでまた“*Chariot fierce*”と *Miltonic inversion* がありますが、これも韻律上の必要からです。最終行 125 行目でサターンは今の自分の気持をはっきりと表明します。

“Saturn must be King”

この短い言葉がなんと力強く、また悲痛に響くことでしょう。

「没落」はこれに対して次のようです。

### Moan and wail.

Moan, brethren, moan; for lo! the rebel spheres  
Spin round, the stars their antient courses keep,  
Clouds still with shadowy moisture haunt the earth,  
Still suck their fill of light from sun and moon,  
There is no death in all the universe  
No smell of Death—there shall be death—moan, moan,  
Moan, Cybele, moan, for thy pernicious babes  
Have chang'd a God into a shaking Palsy.  
Weak as the reed—weak—feeble as my voice—  
O, O, the pain, the pain of feebleness.

(*The fall of Hyperion*, Book I, ll. 417-429)

「没落」412行と同じく、「嘆け」で始まります。逆順であれ、“Moan, brethren, moan”に“Moan and wail”がさらにつけ加わって、意味が強められています。次の数行は自分が王位を失っても、世の営みは変らぬと叙述されます。“rebel spheres,” “the stars”、及び“Clouds”と最初の4行は宇宙を、そして422行目、“the tree”, “the seashores”は地上を象徴するものです。尚“still”（今なお）が、“moan”に対応してか4度も使われていることは注目に値します。「自分が王位を失った今もなお」という強い気持ちを表白したいのでしょう。文法的に言えば、419行目で、目的語、動詞の倒置が、422行目では“buds”と“the tree”の間で主語、動詞の倒置がみられます。そしてこれら数行で歌われたことは、続く423行、“There is no death in all the universe”へ総括されます。“death”と言って、“smell of death”と後追い、重畳させて表現を強めます。直後の“there shall be death”こそ、サターンの本音です。自分が王位を失った以上は、世の営みも終る筈なのです。なのに…。彼はただ悲嘆に暮れるばかりです。また、“moan, moan,/Moan”（「嘆け、嘆け、嘆け」）とたて続けに叫びますが、それは、今度は兄弟達にではなくて、自分達神々の母であるシビリーへの呼びかけに代っています。まるで、幼児が母親に甘えるようです。

425行目の“pernicious”とは *O. E. D.* に徴すれば、

pernicious, that harbors evil designs; wicked; villanous. Now rare or obs.

に該当します。“babes”は、言うまでもなく babies のことですが、これは文学語や詩語としては今でも現役の言葉です。これら“thy pernicious babes”で以て、オリンピアの神々を指しているわけですが、そこに我々は彼らに対するサターンの憎悪心の滲みを嗅ぎ取らざるを得ません。次行、“a God”は、“me”，すなわちサターンのことで、神である自分を“a shaking Palsy”にしたとサターンは呪詛します。“shaking”は palsy（中風）の特徴の形容語ですが、この“Palsy”は、病そのものではなくて、“a palsied person”（*O. E. D.*）なのです。今日では廃語になっているこの語をキーツは大文字化して、かつは強意しました。

最後から3行目、427行は繰り返しの“Moan, brethren, moan”で始まります。これで“Moan”の呼びかけは4度で、実に多過ぎます。感情過多、情に棹をさし過ぎています。押え難く溢れる感情にサターンも、語り手キーツも溺れてしまいます——主・客一如の境、彼はここにいたって、時、空の意識を失います。まさに狂気に一步の天才的没入で、叙事詩でありながら、抒情詩たり得るのです。サターンは自己を“weak as the reed”と葦に擬しています。かのイソップの寓話をもち出すまでもなく、葦は古来から自然の中で最も弱いものとされています。パスカルが「パンセ」で人間に譬えたのは周知の通りです。パスカルでの場合をキーツは神に置き代えたのでした。それほどにサターンの存在の微弱を強調したかったのでしょう。“feeble as my voice”，畳み込んで“the pain of feebleness”と、漸層法的手法で弱さに弱さの追い討ちがかかります。

#### 註

- 1) *The Poems of John Keats*, ed. by Miriam Allott (London: Longman, 1970), p. 681.
- 2) *The Loeb Classical Library, Hesiod: The Homeric Hymns and Homeric* (London: William Heineman, 1950), p. 10.

- 3) *ibid.*, p. 11.
- 4) *The Leob Classical Library, Orvid : Metamorphoses* (London : William Heineman, 1921), pp. 8& 10.
- 5) *ibid.*, pp. 9& 11.